

中国地方

あのまち

TOTTORI / SHIMANE

このまち

山陰エリア

— 鳥取・島根 —

電気新聞
地域版



出雲大社・御本殿拝殿

根差す 文化と使命感

歴史の地・山陰



夕暮れ時の宍道湖



大山



石見神楽



智頭宿



鳥取砂丘



倉吉の白壁土蔵群



隠岐国分寺の蓮華会舞



金持神社

CONTENTS

- 2-3 … 日本神話にも通ずる伝統芸能と夏祭り
- 4 … 山陰の伝統工芸—1300年の歴史ある和紙
- 5 … 安定供給に懸ける—中国電力ネットワーク山陰NWC所長インタビュー
- 6-7 … 安定した電気を届ける—中国電力ネットワーク各事業所の取り組み
- 8 … 山陰観光マップ

ヤマタノオロチ退治の演目が多い



いわかぐら
石見神楽

勇 壮

華麗な舞に酔う

石見神楽は島根県西部の石見地方に伝わる伝統芸能。古事記や日本書紀に記された日本神話を現代に伝えるものでもある。天の岩戸に隠れた天照大御神を外へ誘い出すため、神々が岩戸の前で踊りを見せたとの神話が始まりだともいわれている。

現代では秋の例大祭などで五穀豊穣に感謝しながら、神社境内にある神楽殿で各地の団体が夜通しで舞っている。お囃子にはリズムの速い八調子とゆったりした六調子がある。「勇壮で華麗な舞」として全国的に有名であり、その特徴は豪華な衣装。金糸や銀糸をふんだんに使い、龍や虎をはじめ自然や植物まで演目にまつわる絵柄が編み込んである。



▲ 五穀豊穣に感謝しながら舞い踊る

話の世界」が日本遺産の認定を受けた。石見観光振興協議会の永井文也主任によると、石見地域には神楽を舞う団体が140ほどある。国内はもちろん北米や欧州など海外に呼ばれて公演したこともあるという。

昨年(2022年)9～11月を「石見の神楽在月」と銘打ち、石見神楽をアピールするキャンペーンを開始。永井主任は「インバウンドも回復してくるだろうから、国内はもちろん海外のお客さまにも興味を持ってもらえるようにPRしたい」と意気込みを見せている。

▼ 石見観光振興協議会の永井主任



珠 玉

山陰地域には出雲大社など由緒正しい神社が多く存在し、日本で最大の砂丘でもある鳥取砂丘をはじめとする観光資源も豊富。島根県の伝統芸能である石見神楽は日本神話を題材としており、その勇壮な舞は多くの人を魅了する。山陰地域の伝統芸能や郷土祭を紹介する。

美 景

すいごうさい
水郷祭

湖面を彩る花火



松江水郷祭は毎年8月に松江市で開かれる大規模な夏祭り。西日本最大級の湖上火火大会と、松江城の特設ステージで市民が踊りを披露する「松江だんだん夏踊り」など

を共同開催している。湖上火火大会は宍道湖の美しい湖面が舞台。年によって異なるが、近年は1万発もの花火が打ち上げられる。色とりどりの花火が宍道湖の水面に映り込む「逆さ花火」も絶景だ。湖畔で行われる花火大会としては西日本で最大級といわれている。

▶ 宍道湖で開かれる湖上火火大会、1万発もの花火が打ち上げられる

SHIMANE 定番スポット

▶ 松江城



▲ 天守の最上階から松江の街を一望できる

400年前の姿、今にとどめ

江戸時代より前に建てられた城のうち、現在まで天守が残っているのは12カ所のみ。その一つが松江城だ。壊れることなく現代にまで昔の姿を残す特別な存在といえる。中でも慶長16年(1611年)に完成した松江城の天守は彦根城や姫路城と並び、近世の城郭を代表する天守として国宝に指定されている。12カ所のうち2番目に広く、3番目に高いところも特長。天守の最上階まで上がれば、松江の街をぐるりと一望できる。

▶ 小泉八雲記念館



▲ 八雲の生涯をたどることができる

怪談生んだ、ゆかりの品

「ろくろ首」や「耳なし芳一」といった日本で古くから知られる怪談の作者であるパトリック・ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)。この作家にまつわる遺愛品を展示してある。小泉八雲の著書や関連書をそろえたライブラリーも併設。八雲の生涯をまとめた映像展示コーナーもあり、小泉八雲という人物の生涯をたどることができる。

▶ 三徳山三佛寺投入堂



険しい山道、
絶壁の奥院

標高900メートルの三徳山に三佛寺の境内がある。この山岳寺院の奥院は「投入堂」と呼ばれ、垂直に切り立った絶壁の窪みに建てられている。詳しい建造時期は不明だが、修験道の開祖・役小角が法力を使って建物ごと平地から投げ入れたという伝承が語り継がれている。非常に珍しい建築物であり、国宝の指定も受けている。投入堂を間近で見るとは険しい山道に入る必要がある。鎖を使って登る場所もあるため、しっかりした服装がおすすめだ。

▲ 法力で投げ入れたとの伝承が語り継がれる

▶ 鳥取砂丘



広さ最大級、
圧巻の景観

鳥取砂丘は日本海に広がる美しい海岸砂丘で、観光できる砂丘として日本最大級の広さを誇る。その一部は国の天然記念物にも指定されており、中央部にある砂の丘（通称・馬の背）は真下から眺めると約47メートルもの高さがあり圧巻な風景だ。日本海の風が作り出す風紋はとても美しく、圧倒的な存在感を誇る。砂丘ではラクダ乗り体験やパラグライダーなども楽しめる。鳥取砂丘は長い年月を掛けて形成された。中国山地の花こう岩などが風化して砂になり、雨によって川へ流される。日本海に出ると波の力で海岸へ押し戻され、強風によって内陸へ飛ばされる。これらが繰り返されて現在に至る。

▲ 観光できる砂丘として日本最大級を誇る

2023年(令和5年)3月27日(月曜日)

電 氣 新 聞

山陰の芸能と祭り

躍動

鳥取 しゃんしゃん祭

——鈴が響く傘踊り



4000人超が一斉に傘踊りを披露する、踊りの要所で鈴の音が心地よく響く▶

鳥取しゃんしゃん祭は、毎年4千人を超える参加者が一斉に傘踊りを披露するお祭り。全国でも広く知れ渡っている。「しゃんしゃん傘」と呼ばれる和紙製の傘を用いるのが特徴だ。この傘の起源は鳥取県東部の伝統芸能「因幡の傘踊り」の傘。これを二回り小さくして誰でも踊れるような形にした。竹で組んだ骨組みに和紙を張り、赤と青の色を塗ってから金銀の短冊で飾り付ける。内側に鈴を

取り付けるため、踊りの要所でしゃんしゃんと鈴の音が心地よく響く。

しゃんしゃん傘は製作するのに手間がかかるため、もともと気楽に参加してもらおうと2005年に「すずっこ」が考案された。幅広のしゃもじのような板に6個の鈴を取り付けた楽器。これを振ると「しゃんしゃん傘」と同様に鈴の音が鳴り響く。

しゃんしゃん傘は直径80センチ、長さ120センチあるため踊りの動きに制約が出てしまう。「すずっこ」は手のひらサイズを一回り大きくした形で軽いため、踊りの振り付けで様々な工夫が出せるという。



▲「すずっこ」を使えば踊りの幅が広がる



豊作を願い、 踊り明かす

えびじゅうしちや 江尾十七夜

現在鳥取県江府町の江尾地域を中心に各地で踊られている。「こだいち踊り」だ。現在は鳥取県江府町の江尾地域を中心に各地で踊られている。集落によってはお盆の中で1日を定め、村を挙げて老若男女が一晩かけて踊り明かして先祖の霊をなぐさめる。近隣地域の若者たちも参加するため賑わっているという。特に盆の17日は「江尾の十七夜」と呼び、県内はもちろん近隣県からも見物客が押し寄せるほどの一大行事となっている。踊りに加え、大人による奉納大相撲や久連山の火文字、花火なども行われるほど盛大な夏祭りだ。



◀ 火文字や灯ろう流しなども行われる

500年ほど続く伝統的な祭り。その中核をなすのが鳥取県無形文化財にもなっている「こだいち踊り」だ。

500年も続く伝統的な踊り▶

(第三種郵便物認可)

伝統に根差す、 山陰の逸品たち

1300年の歴史がある因州和紙と石州和紙など、
山陰地域は伝統工芸も魅力的。
観光地だけでなく、和紙や陶器の工房も訪ねてみたい。

国内の和紙産地は12カ所ほどある。古くは奈良時代にこれらの和紙で文献がしたためられており、いずれも約1300年の歴史を誇る。因州和紙の産地で鳥取市青谷町にある「あおや和紙工房」の山崎博己館長によると、和紙の原料は楮、三桧、雁皮の3種類。楮は繊維が太くて丈夫なため障子や壁紙、ふすま、和傘、灯籠などに用いられている。三桧は植物の繊維が細くてしなやかなので書道用に向いている。因州和紙は書道用として国内トップシェア。ただ需要が減っているため、イン



あおや和紙工房 館長
山崎 博己さん

▼ インテリアで使える和紙を販売している



テリアやアート向けの需要開拓に取り組んでいるという。

因州和紙は職人が手作業で製造する。強度や耐久性は同じだが、「枚ずつの風合いが異なる」と山崎館長はインテリアに向いている理由を説明する。そのため壁紙やタペストリーなど向けの和紙を試作し、試験販売する考えだ。すでに写真スタジオから「撮影時の背景用に使いたい」との依頼を受けており、ショットバーからも引き合いがあった。ガラステーブルの下に敷き、雰囲気演出するのが目的だ。

青谷町の和紙製造企業は2002年に20社が存在した。現在は11社まで減少。山崎館長は和紙の用途を広げることと「因州の和紙産業を盛り上げていきたい」との抱負を述べている。

風合い様々、インテリアに



▲ あおや和紙工房では紙すき体験ができる

▼ 因州和紙で作成した造花なども展示してある



▲ 様々な和紙や材料が展示してある

一口メモ

海外から熱視線

あおや和紙工房は2002年のオープン。コロナ禍に入る前は年間2万4000人が来場していた。その2割強が海外からの観光客。成田空港などに到着してから「ピンポイントでお越しくださっていた」(山崎館長)こともあり、日本の和紙に興味を持つ欧米人は多いようだ。

同工房は毎年1～3月に「因州和紙あかり展」を開いている。因州和紙の照明作品を展示するイベントで、毎年作品を募っている。

島根県江津市などで作られる石見焼は水を吸いにくく、強固な陶器だ。「飯銅」と呼ばれる大型の水がめが特に有名。江戸時代末期には北前船で全国へ出荷されており、石見の「はんど」として親しまれていたという。

現在は水がめをはじめ、茶器や花壺、食器なども作られている。酸や塩に強いため、梅干しなどを漬ける壺にも適している。1994年には島根県で4番目の伝統工芸品に指定された。



「強い器」
「親しまれ」



▲ 江津市市場産業振興センターで販売している石見焼の作品

島根県西部の石見地方で石州和紙(石州半紙)が製造されている。主な原料である雁皮は粘着性があり虫害に強いのが特徴。完成した雁皮紙は光沢があり、書画用紙や便せんなど様々な用途がある。江戸時代には石州和紙が帳簿に用いられていた。水に強いため、火事が起きても帳簿を井戸に投げ込んでおけば焼失せずに済むからだ。

1969年に「石州半紙」が国の重要無形文化財に指定。2009年にはユネスコの無形文化遺産にも登録された。



「帳簿」
「水に耐えた」



▲ 石州和紙会館で紙すき体験などが行える

歴史と伝統の山陰に、電気を届ける

広いエリア、日本海 の気象、 寄り沿い工夫

中国電力ネットワーク山陰ネットワークセンター（NWC）は、山陰地域の送配電設備を運営している。雪害や塩害といった自然災害への対策を施し、強い使命感を持ちながら地域へ安定的に電気を届けている。社会貢献活動にも取り組む同NWCの新谷昌二所長に、安定供給に対する意気込みと地域への思いを聞いた。

—山陰エリアの送配電設備を受け持っています。特筆すべき特徴を教えてください。

「当社は中国5県を4ブロックに分けて統括的なネットワークセンターを置き、安定供給を担っています。鳥根県と鳥取県にまたがる山陰NWCは、4ブロックのうち面積が最大で、東西も300キロメートルあり最長です。日本海側のため夏秋は台風、水害や落雷、冬は雪害が発生しやすい環境ですが、厳しい条件下でも安定供給を続けられるよう、日々、災害に備えた設備形成や訓練に取り組んでいます」

工事を計画的に

—停電を起こさないために気をつけていることは。

「各地の気象条件に合わせて設備の設



中国電力ネットワーク
山陰ネットワークセンター所長
新谷 昌二 さん

—大規模な離島である隠岐諸島を管轄しているのも特徴です。

「隠岐諸島には、隠岐NWCがあり日々の対応を行っています。限られた要員であり、台風が襲来すると復旧要員が不足します。荒天時はフェリーが欠航し隠岐へ渡れなくなるため、本土から事前に復旧要員や車両を送るなど、特に重点を置いて対策を施しています」

発展支える使命

—山陰の皆さんにメッセージを。

「当社は3年前に中国電力から分社化し、送配電設備を担う会社として設立しましたが、電気を安定的に供給するという使命感は以前と変わりません。安定供給や社会貢献活動を通じて地域の発展に貢献するため、今後もしっかりと業務を進めていきます」

地域とともに

益田ネットワークセンター



配電課
大庭 仁志 さん

中国電力ネットワークの各事業所では、学校に向向いての出席授業や、地元イベントへの参加など、社会福祉、教育、環境保全などのさまざまな分野で社会貢献活動に取り組んでいる。

日本海に面す益田NWCは、毎年、益田市にある中須海岸の清掃活動に取り組む。2005年から毎年続くこの活動に、今年はグループ企業やOBも含めて35人が参加した。初夏で汗ばむ暑さに加え、新型コロナウイルス対策でマスクも着用しており、水分補給など熱中症に気をつけながら、2時間弱をかけて海岸全域のごみを拾い集めた。

参加した配電課の大庭仁志さんによると、「遠目で海岸を眺めるとごみは少なそうに見えた」という。しかし、実際に作業を始めるごみは多く、最終的に2トントラック4台分の量を回収した。

プラスチックごみに加え、意外と多かったのは漁網や大型の浮き。参加者はごみ袋に拾い集め、大きいものは数人で協力しながら収集、トラックに積み込み、集積所へ運んだ。

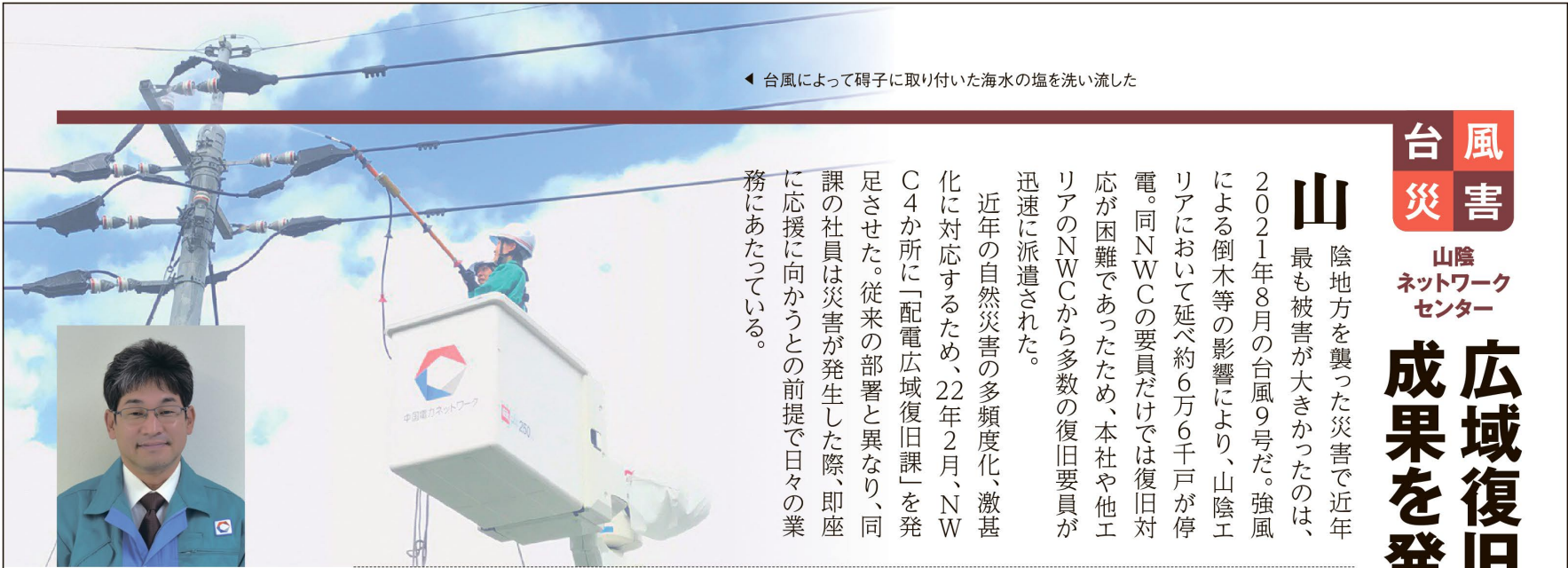
清掃には毎年、地元の中須



◀ 中須海岸の清掃活動は地元からも感謝されている



▲ 2022年6月の清掃活動で2トントラック4台分のごみを回収した



◀ 台風によって罫子に取り付いた海水の塩を洗い流した

台風災害

山陰
ネットワーク
センター

広域復旧体制、 成果を発揮

山 陰地方を襲った災害で近年最も被害が大きかったのは、2021年8月の台風9号だ。強風による倒木等の影響により、山陰エリアにおいて延べ約6万6千戸が停電。同NWCの要員だけでは復旧対応が困難であったため、本社や他エリアのNWCから多数の復旧要員が迅速に派遣された。

近年の自然災害の多頻度化、激甚化に対応するため、22年2月、NWC4か所に「配電広域復旧課」を充足させた。従来の部署と異なり、同課の社員は災害が発生した際、即座に応援に向かうとの前提で日々の業務にあたっている。

山陰NWC
配電広域復旧

課の山野恵二担当副長が「数日分の宿泊道具を会社に常備している社員もいる」と話すほど、大規模災害に対する課員の意識は高い。

通常時は各NWCへ出向き訓練指導をしたり、より効果的な訓練方法などを検討。いかなる事態が起きても迅速な復旧が出来る人材育成も手掛けている。山野さんは「停電しないよう対応しつつ、停電しても早期復旧に努める」と意気込みを示す。

災害の復旧対応に取り組むのは配電広域復旧課だけではない。台風や大雪が予想される際は、企画課が気象情報を集め担当エリア全体の被害を予測し、事前に各NWCへ復旧要員を派遣するなど、全体を俯瞰した戦略を立てている。

山陰NWC企画課の手槌浩司副長は「災害が起こりそうになったら出勤するとの使命感を常に持ち続けている」と話し、「安定供給の確保に向け、全所員が一丸となって取り組む」と強調する。



▶ 配電広域復旧課は様々な訓練に取り組んでいる(写真は仮送電訓練)



配電広域復旧課 担当副長
山野 恵二さん



企画課 副長
手槌 浩司さん

台風、雷、雪

——自然の脅威に立ち向かう

山陰地方は夏秋に台風や雷害、冬は雪害が発生するため、山陰ネットワークセンター(NWC)は停電を予防する対策や設備の巡視に余念がない。停電の防止と復旧の迅速化に向けた各種の取り組み内容を紹介する。

▼ 雪の重みで電線が引っ張られて倒れた電柱の復旧作業



雪害対応

鳥取
ネットワーク
センター

経験生かして、 設備を強く

鳥 取県は降雪量が多く、山間部では3メートルに達する地域もある。雪の重みにより広範囲で電線に樹木が倒れ、同時多発的に停電が発生する事態が年1、2回ほど発生している。

このため、電線へ樹木が接触しても停電しないよう一部の電線を雪害対策製品に取り換えている。採用する電線は被覆を多重化し、樹木と接触しても高い耐摩耗性を有しているもの。また、電柱も倒木の衝撃を考慮した高強度のものに建て替えを進めている。

設備の強化に加え、鳥取NWCは自治体との連携にも注力。大雪により倒木する恐れのある樹木を自治体と協力して、降雪期を迎える前に伐採する。この「事前伐採」は土地所有者の了解が必要。配電係課の林亨一課長は、所有者の理解を得るためにも「自治会や自治体と連携することが重要」と説明する。

これらの対策は2020年12月の大規模雪害から得た教訓を生かして実施。20年と21年を比較すると、事前伐採を実施した地域では倒木が発生せず、設備強化を行った地域では停電数が約3分の1にまで減少した。目に見える効果が出たため、林さんは「事前対策や工事に取り組む社員、協力会社もやりがいを感じる」と話す。

「災害時には応援要員を確保し短時間の復旧に努めている」とも前置きし、今後も設備の強化を進めて「地域や自治体と連携しながら安定供給に努めていきたい」と意気込みを見せる。



配電係課 課長
林 亨一さん

合同
訓練

山陰・浜田
ネットワーク
センター

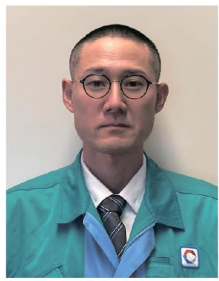
連携確実に、
日頃から備え

中

国電力ネットワークは災害時に備え、海上保安本部や消防本部など複数の機関と合同訓練を行っている。浜田NWCでは2022年10月に浜田海上保安部と海上輸送訓練を行い、山陰NWCでは同年11月に鉄塔を使った高所救助訓練を松江市消防本部と実施した。災害復旧に関連する各機関との訓練を通じて対応力の向上に努めている。

海保との訓練は、大雨で土砂崩れなどが発生し陸路が寸断されたとの想定で実施。海保の船舶に復旧用の資機材を載せ航行した。

浜田NWC配電保修課の佐々木和憲主任によると、資機材の運搬と船上での固定作業を中国電力ネットワークの社員が実施。甲板の固定用リングや段差を活用し固定したが、海保職員からは「航行時は立体的な揺れとなるため、しっかりとした固定が必要。防護柵の柱も使用してもよ



浜田ネットワークセンター
配電保修課 主任
佐々木 和憲さん



山陰ネットワークセンター
送電課 担当副長
池淵 強さん

▼ 鉄塔上で動けなくなったと想定した消防との合同訓練



い。」とのアドバイスを受けた。固定方法を学べたほか、資機材を運搬する際の役割分担についても意見交換。佐々木さんは「訓練を通して貴重な経験を積めた。災害時には迅速な復旧につなげたい」と意欲を見せている。

消防本部との救助訓練は山陰NWCが実施。鉄塔上で作業中、地上20メートル地点で動けなくなった作業員を救出するとの想定だ。

山陰NWC送電課の池淵強担当副長によると、訓練前に救助隊へ電気設備や感電防止に関する研修を実施。訓練には送電中の鉄塔を使用したため、感電防止のため危険区画標示旗を設置し、安全に救助活動ができる行動範囲を地上と鉄塔上に分かれて救助隊へ説明した。

池淵さんは「より安全に救助するための環境を整備できた」と強調。実際に鉄塔上で作業員が動けなくなった場合でも、落ち着いて対処できそうだ。

海保と合同で資機材運搬の訓練を行うことで迅速な復旧につなげる



隠岐諸島の安定供給を守る

隠岐ネットワークセンター

島伝いの送電、確実な保守 — 隠岐の安定供給を守る

「安心して使って」強い思い

隠岐諸島は島根半島の北方約80キロメートル地点に位置する。有人島としては、最も大きい「島後」、3つの島からなる「島前」があり、人口は約1万9000人。島後と島前、それぞれにディーゼル発電機があり、これを海底部分約17キロメートルを含む送電線でつないでいる。

島前の3島それぞれも、海上と海底を通る配電線で接続。知夫里島の岬にある径間1200メートルの鉄塔は高さ22メートルだが、海拔130メートル地点にあるため「航空障害灯が不可欠」と隠岐NWC配電課の錦織幸司担当副長は説明する。

航空障害灯の電球は年に1回の頻度で交換する。隠岐諸島は全体的に風が強く、鉄塔のある場所は、過去には強風で車が横転したことも。作業は天候を見極めて計画する。

隠岐NWCは島後にあるため、島前で作業を行う際は航路での移動となり様々な制約がある。しかも、冬は荒天でフェリーの欠航も珍しくなため、2016年からは島前に1〜2人の要員を配置している。何か起きた時も迅速に対応するためだ。

錦織さんは「離島だが本土と遜色のないサービスレベルを維持する」と強調し、「地域の皆さまには安心して電気をご利用いただきたい」と話している。



配電課 担当副長
錦織 幸司さん

脱炭素へ、先端の地として
再生可能エネルギーの力引き出す
ハイブリッド蓄電池

中国電力ネットワークは、国内初となるハイブリッド蓄電池システムを隠岐諸島に導入している。太陽光発電と風力発電の電気を大量に貯められる「NAS電池」と、太陽が陰るなどして発電量が変動しても素早く対応できる「リチウムイオン電池」という2種類の蓄電池を組み合わせ、状況に応じて充電・放電を行っている。

また、「EMS(エネルギー・マネジメント・システム)」と呼ぶ制御システムが、隠岐諸島内の電気の使用量と再エネの発電量を予測し、蓄電池による充電・放電とディーゼル発電機の発電量を制御している。

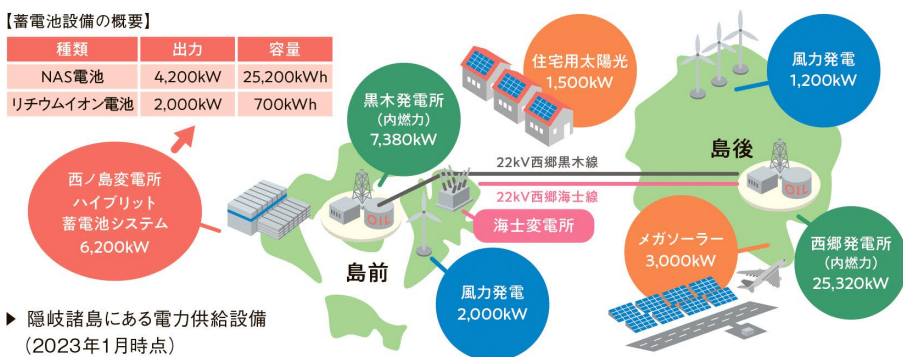
本システムの実証を、2015年9月末から3年半かけて実施。安定供給に貢献しつつディーゼル発電機の二酸化炭素排出量を約8%削減できた。現在も、安定した運転を継続しており、担当する山陰NW



山陰ネットワークセンター
変電課(所属は取材当時)
金平 喜孝さん

【蓄電池設備の概要】

種類	出力	容量
NAS電池	4,200kW	25,200kWh
リチウムイオン電池	2,000kW	700kWh



▶ 隠岐諸島にある電力供給設備 (2023年1月時点)

山陰エリア
—鳥取・島根—
観光マップ

鳥取県
TOTTORI



日本海では初夏から晩秋にかけて、ケンサキイカを一本釣りで捕獲している。鳥取県では「白イカ」と呼び、濃厚な甘みがある夏の味覚だ。



豚骨ではなく牛骨でスープを作る鳥取県のB級グルメ。スープはほどよい甘みがあり、まるやかな味わいが特徴だ。特に県中部で提供する店が多い。



成長した雄のズワイガニを「松葉ガニ」と呼ぶ。鳥取を代表する冬の味覚だ。ゆでガニはもちろんのこと、刺身でも焼いても優しい甘みを楽しめる。甲羅酒も絶品だ。

島根県
SHIMANE

出雲そば



島根県を代表する郷土料理。黒っぽい見た目が特徴だ。そばの実に殻がついたままの状態で挽いて粉をつくるため黒っぽくなるものの、香りも栄養価も高い。

隠岐諸島

のどぐろ



石見神楽



のどぐろ



高級魚の「のどぐろ」は全国で水揚げされるが、島根県が特に有名。中でも浜田市は「どんちっちのどぐろ」としてブランド化しており、その味は絶品だ。

水郷祭

出雲大社

松江城



しじみ

しじみ



島根県は湖でシジミが捕れる。スーパーに行けば、キロ単位で販売している地域もあるという。特に有名な産地が宍道湖。その漁獲量は全国1位といわれている。